

# 2002 年度夏期語学研修（中国）報告

山 本 忠\*

## A Report on Summer Chinese study in Shenyang University of Technology in 2002

Tadashi YAMAMOTO\*

### Abstract

The second Summer Chinese study program for the students of Hachinohe Institute of Technology was held in Shenyang University of Technology, China.

Seven students and one resident who retired from H.I.T. joined this program, and they achieved good results and made progress in studying Chinese language and developed their understanding of inter-culture in this program, too.

**Key words:** Chinese language, understanding of inter-culture, cosmopolitan outlook

### 1. はじめに

昨年中国での第一回目の語学研修が実施され、語学力の向上、異文化理解、国際交流の面で成果を得たことについてはすでに報告したとおりである（注1）。

本年も、昨年の経験に基づき同様の語学研修が計画され、昨年より3名多い参加者を得て実施された。本稿は二回に亘る中国での海外研修を総括し、問題点と改善案を提示することで今後の同様の活動に資することを目的とするものである。

### 2. 研修の目的、場所、日程、旅行業者

研修の目的は昨年と同じである。即ち、① 座学と中国滞在期間の生活における実践を通して会話を主とする語学力を向上させ、② 五感をフルに利用して中国を体験し、中国の社会、文化、歴史、習慣の理解を深め、③ 国際感覚を養

うことを目的とした。

研修場所も姉妹校で実績があることから、昨年同様に瀋陽工業大学とした。

研修期間は2002年8月18日から9月1日の15日間で、この間の日程は受け入れ部署である瀋陽工業大学国際交流センターから昨年と同じ日程表が提示された。実際の主な活動内容を別表「2002年 海外語学研修（中国）活動表」に示す。実際に行われた活動は、瀋陽到着後、前年の参加者の帰国後の感想と今年の参加者の希望を勘案して、山本が国際交流センター処長と相談して作成した日程によるものである。その結果、日程中ほどに一泊の小旅行を入れ、研修の終わりに自由時間を多く取る形となり、参加者の好評を得ることができた。

旅行業者は昨年の経験と実績がある近畿日本ツーリストにお願いした。

### 3. 参 加 者

学生の参加者は、一年生は環境建設工学科1名、建築工学科1名、システム情報工学科2名

---

平成14年12月26日受理

\* 総合教育センター・助教授

(何れも女子)、の計4名、二年生は電気電子工学科1名、それに大学院電気電子専攻修士2年1名(昨年に続き2回目の参加)、本学卒業生1名、さらに昨年本学を退職した元教員が1名加わり、引率者を含めて9名となった。参加学生の学年構成が、昨年はばらつきが無かったのに対して、本年は低学年層と高学年層に二分した。また、少数ではあるが参加者が増えた理由は説明会を度々行ったこと、特に昼休みの時間帯に学生ホールに出向いて一対一の形式で研修の説明、勧誘を行ったことが有効であったと感じている。

#### 4. 生活環境

##### 4.1 宿舎

宿舎も昨年と同じである。ただ、給湯設備修理のため一週間シャワーが出なかった。ある者は水で、またある者はポットの湯で対処した。便利な生活に慣れた身には辛く感じたことであろうが、不満を言う者もなく、柔軟に受け止めてくれた。

国際交流センター所長の話では、来年までに南キャンパスに併設されているホテルを譲り受け改修するので、居住環境は格段に改善されるとのことである。

##### 4.2 食事

食堂は旧留学生宿舎一階の食堂で取った(写真1)。料理は昨年報告したとおりで、今年の学生たちに人気が集まったのはチャーハン、水餃子、麺類、お粥の主食と肉料理であった。珍しいものでは「蚕のさなぎの炒め物(注2)」を出してもらい数人が賞味した。

料理自体には不満は出ないが、滞在数日で日本の味が恋しくなるので、味噌汁、海苔、出汁入り醤油などちょっとした日本の味を携行するよう勧めた。研修後半には山本が稲荷寿司を振舞って、好評を得た。香辛料で疲れた胃を休め、精神的にも健康を維持する役割をはたすことが



写真1

できた。

##### 4.3 市内と大学周辺

古い建物の取り壊しと、高層ビルの建設は相変わらず進んでおり、戦前戦中日本人が建てた家屋も少なくなっている。研修期間中、市内200本以上の道路が一斉に補修工事され、それによる交通渋滞と砂塵が激しかった。

大学周辺はまずインターネット・カフェが増えた。数年前は学習目的で利用する学生ばかりであったが、今年覗いたところはすべてゲームセンターの様子を呈していた。24時間営業のコンビニエンス・ストアができ買物が一層便利になった反面通りに面した昔ながらの市場が撤去され情緒が失われた。

#### 5. 連絡体制

平常時、緊急時を問わず八戸との安定で信頼できる通信手段を確保することが大切であることは言うまでもない。昨年は日々の定時報告の手段として外事処のFAXを借用させて頂いた。しかし、昼休み時間近くの時間帯は職員が不在の場合が多く利用できないことや、日本との回線の状態が思わしくない時もしばしばあり、不便を感じることもあった。

そこで本年はFAXによるより詳しい定時報告は外事処職員が在室している割合の高い9時



写真 2



写真 3

（現地時間、日本時間の 10 時）に、また補助的に携帯電話での簡略な報告を毎日 13 時（同上）に行った。携帯電話による連絡は、機動性、確実性の面で今回最も有用な通信手段であったが、レンタル料金がやや高額（注 3）であり、回線の状況によっては通じない日もあった。

アメリカでの昨年の語学研修では電子メールによる定時報告がなされたが、我々の宿舎には設備環境が整っていなかったので、大学西門横のインターネット・カフェ（写真 2）からデジタル・カメラで撮影した画像を送った。



写真 4

## 6. 語学講座

教室：語学講座全て宿舍一階の 12 人用小教室を使った。留学生専用の教室で机、椅子、黒板などの設備は瀋陽工業大学の学生用教室の設備より新しくてきれいである。

教員：去年と同じ徐原清先生。

テキスト：北京語言文化大学出版社の外国人向けに編纂された一年生教材語言技能類の内「漢語教程」第一冊上巻を用いた。本書は全 15 課で構成されており、発音の最初歩から始まり、実用的な会話文が主体の入門用テキストである。全 8 回の講座、合計 24 時間ですべて修了した。

授業の進め方：2 名を除いた他は一年生と、中国語未修者であることに配慮して始めのうちは緩めの進度であった（写真 3, 4）。ただ、先生

の模範発音の速度は通常の会話の速度より遅いのだが、受講生にとってはまだ速いようすで、復唱するのに戸惑う場面も見受けられた。

毎課の流れは、語彙説明と発音練習、本文の説明とコーラスリーディング、その後個別の発音矯正、最後に入れ替え応用会話と進められた。各課には文法説明の項目もあるが、徐先生はほとんど触れなかった。

発音練習の際声が小さいことは、日本人学生によく見られる欠点であると普段から感じている。去年はリーダー的役割を果たす受講者がいたので教室内の雰囲気は活発であったが、今年は相対的におとなしかったのは残念である。



写真5

## 7. 見学，旅行，買物など

### 7.1 見学

見学地としてまず「九一八歴史博物館」を訪ねた。これは参加した若い世代に、現在の日中関係がどのような歴史の流れで今日に至ったかを言うことにも関心を持ってもらいたいと思ったからである。日本では見られない内容と表現に少々困惑気味の様子であったが、熱心に見入っていた。

昨年好評だった農村見学は今年も実施された。最初に訪問したのは葡萄園(写真5)で、今年はオーナーの王氏が直接案内してくれた。氏によれば本農園は面積330アールすべて葡萄酒用を栽培しており、繁忙期には60人を臨時に雇っているとのことである。農村見学では次に菊作り農家の伊さん宅を訪れた。伊さんは大きな行事に使われる大輪の菊作りの名手で、コンクールで入賞した菊を収めたCDを我々に披露してくれた。

王さん、伊さん共に農業者として大変成功している人で、余裕と自信に溢れる表情が印象的であった。また二人とも農薬の使用を極力避けていることを強調していた。

人口600万人を数える瀋陽は近代的な高層ビルが立ち並ぶ中国有数の大都市であると同時に清朝発祥の歴史の街でもある。そこで清朝の宮殿跡である「故宮」とその当時の町並みを再現

した商業地「中街」を見学した。故宮内部の建築物はこれまで何度か修復されているが、15世紀に据えられた当時の礎など古いものも残されている。建築工学科の学生にとっては見学時間が余りに短く感じられたようだ。

### 7.2 旅行

一泊の旅行がしたいという参加者の希望があったので山本が「丹東旅行」を提案した。理由は山本自身が過去に訪れて土地勘があること、一泊旅行として適当な距離にある観光地(写真6 新婚旅行客と)であること、対岸に北朝鮮、朝鮮人民民主共和国が間近に見られることなどによる。ここでは図らずもタクシー運転手の案内で万里の長城の一端(写真7)に登ることができ、また長城の麓の中朝国境の小川(写真



写真6



写真7





写真 8



写真 9

8)で北朝鮮の男性と対話することもできた。ビデオ撮影はこの男性から禁じられたが、国境を示す柵も警備兵も見当たらず、緊張感は感じられなかった。

昨年も訪れた「本溪鍾乳洞」はこの地方の言わば定番の観光地の感がある。鍾乳洞の中は約15度、電動ボートで往復45分かかる。日本人は自然のあるがままの景観を楽しむ傾向があるのに対して、中国は自然の岩に大きく文字を刻むなどして「書」と「風景」を同時に鑑賞する。鍾乳洞内部の様々な鍾乳石には刻んだ文字こそなかったが、原色の照明や説明の看板が、参加した学生には不評であった。

研修も終わりに近い13日目には、学生たちだけで日帰りの旅行を体験させた。場所は「怪坡」という上に見える坂が実際は下り坂になっている観光地で、去年も行った経験がある院生にリーダー役を任せた。

## 8. 交 流

我々の滞在期間は中国の大学も夏休み期間で、大方の現地学生は帰省している。また、現地の受け入れ部局もこれまで中国の学生と日本の学生の交流を積極的に促す姿勢は見られなかった。一方で日本の学生からは中国の学生との交流を望む複数の声が去年から聞かれていた。今回参加した学生の一人は訪中前に電子

メールで瀋陽の学生と連絡を取り、現地で会う約束を取り付けていた。彼らは現地教員の案内で面会を果たし、太原街での買物やバレーボール(写真9)、バスケットボールを共に楽しんだ。これは去年にはなかった積極的な行動である。宿舎内では、同年代の服務員とカードゲームに興じたり、夜間守衛のおじいさんにも買物に出かけた際のお土産を渡すなどして交流を深めた。ただ、同じ宿舎には韓国からの留学生が数十人規模で来ているが、彼らとの交流が果たせなかったのが心残りではある。

## 9. 課題と対策

短期間の研修ではあったが、それなりに語学力の向上がはかられ、見学、旅行を通して中国社会を体験し、理解を深めることができた。特に、中国の同世代の人々と交流できたことは今回の参加者にとって大きな刺激になった。

他方、課題としては次の項目が挙げられる。

### ①健康維持

人数、症状とも昨年より軽微であるが下痢を訴える者が出た。また、日程半ばで38度台の発熱を伴う風邪をひいた学生が1名あった。何れも原因は特定できないが、基本的な健康管理、即ち、疲労を翌日に持ち越さず、暴飲暴食を慎み、室温管理に注意することで防げるように思われる。

## ②紛失物

帰国の途に着くため空港で最後のエックス線検査をした後、学生の所持品の一つがが見つからない事件が起きてしまった。空港当局の管理ミスではあるが、帰宅するまで気を抜かない心構えも必要であろう。

## ③参加者数の拡大と引率者の複数化

20名の募集枠に対して7名の参加は決して十分な数とは言えない。更に多くの学生の参加を促すためには、

- a 研修内容を更に魅力的なものにする
- b 異文化とふれあうおもしろさを宣伝する
- c 参加費用を出来るだけ低減する
- d 受け入れ大学からも本学学生に募集の

メッセージを送ってもらう  
ことなどが考えられよう。

引率者の複数化については昨年の報告でも述べた通りであるが、万一の際の事故処理を考慮した時、引率者は2名必要と思われる。

## ④目的意識を明確にする

明確な目的を持たずに研修に加わっても、得るものが少ないことは自明のことである。時間、費用、労力をかけて行くからには、何をし、何を学び、何を体験したいのか事前にできるだけ具体的に考えておく必要がある。

## 10. 終わりに

研修が終わって宿舎を離れる早朝、当直の守

衛さんが涙で見送ってくれた。その前の日には日本の学生は礼儀正しいとも言ってくれた。本学の学生が中国の人に良い印象を残してくれたことに感謝したい。

## 謝 辞

本年の研修がともかく無事に遂行されたことについては、受け入れ側の瀋陽工業大学、並びに本学双方の関係者諸氏の理解と支援の賜物に他ならない。また、旅行、買物など行く先々の中国の人々にも親切に接して頂いた。改めてここに感謝申し上げる次第である。

## 附 記

瀋陽側の受け入れ部署は同大学学長の交代に伴い、旧外事処内の三つの部署は独立してそれぞれ、招待所(名称変更なし)、外事科は国際合作処に、留学生科は国際教育学院に改編された。今後の語学研修の受け入れ先は国際教育学院となる。

## 注

- 1 八戸工業大学紀要第21巻 2002年 pp. 373-379
- 2 当地では卵に匹敵する栄養価の高い食材として普通に売られている。
- 3 レンタル料金総計で7万円余りとなった。

2002 年度夏期語学研修（中国）報告

2002 年 海外語学研修（中国）活動表

日数	月日	曜日	午前の行動	午後の行動
1	8 月 18 日	日	苫小牧着 千歳空港集合，出発	瀋陽空港着 荷解き
2	19 日	月	第一回授業	九・一八記念館見学 夜店の通りを散策
3	20 日	火	第二回授業	換金 自由行動（大学近辺散策）
4	21 日	水	第三回授業	故宮，中街見学
5	22 日	木	労働公園散策 第四回授業	太原街散策（買い物）
6	23 日	金	第五回授業	農村見学（葡萄園，菊造り農家）
7	24 日	土	移動 8:43 発丹東行き	丹東市 ホテル チェックイン 鴨緑江公園散策 観光船乗船
8	25 日	日	虎山長城，中朝国境見学	移動 14:00 発瀋陽行き
9	26 日	月	第六回授業	自由行動（日中対抗バレーボール， 買い物）
10	27 日	火	第七回授業	領事館前見学 太原街（買い物）
11	28 日	水	本溪水洞見学	本溪水洞見学 買い物
12	29 日	木	第八回授業	自由行動 買い物
13	30 日	金	自由行動（怪坡旅行）	午前と同じ
14	31 日	土	自由行動（太原街）	荷造り
15	9 月 1 日	日	瀋陽空港発	千歳空港着 解散